

共同研究プロジェクト

ロボット・人間学研究：情報工学と人間学の接点を探る

活動報告

高石 浩一・永澤 哲

今年度本研究会は、メンバーそれぞれが独自の研究課題を持って活動した。

まず高石は、大学院生、修了生らと共に「ロボット研究会」を立ち上げ、話題となったアニメ『攻殻機動隊2ndGIG』を一話ずつ見ながら、そこで取り上げられた近未来の人とロボットの共存社会のあり方を毎回討議するミーティングを行った。各回で取り上げられたテーマは高石の個別報告「攻殻機動隊をめぐる冒険」に添付の資料の通りである。

次に永澤は、研究出張：2012年6月16日～6月18日（東京+福島）によって、以下の成果を得ている。

①ロボット倫理の現状について、田野尻哲郎氏（東京大学大学院、科学史・科学哲学）から情報収集するとともに、討議した。以下の点について、意見の一致を見た。

- ・2008年以降、ロボット倫理の研究に、大きな進展は見られない。
- ・ポスト3.11の時代において、過酷環境における人間の労働力の代理物としてのロボットの重要性が、あらためて浮上しつつある。
- ・ロボット技術と省電力、省エネルギー技術の結合が重要になるだろう。
- ・生物・環境のシミュレーションによる進化プロセスの研究とロボット研究がどのようにリンクするか、今後の研究の重要な論点となるだろう。

②ロボット技術の背景にある第六次エネルギー体系（原子力+コンピューター）の今後について、福島において現地調査をおこなった（調査協力者、福島県庁 M 氏、田中徳雲師、K 医師）。以下の認識、理解を得た。

- ・第六次エネルギー体系の維持は、大きな困難を抱えており、次世代型のエネルギー体系への移行が急務である。
- ・この移行において、生活様式の変化—エネルギー消費の半減—は不可避である。
- ・近未来の第七次エネルギー体系は、リスク管理の観点から、分散型のものとなる。第七次エネルギー体系への移行は、市場経済を社会の中にあらためて埋め込む新しい社会システムへの移行と並行して起こるだろう。そのような状況の中で、ロボット技術がどのような役割を担うのか、不透明である。社会のテクノロジー化には、歯止めがかかるかもしれない。

最後に客員研究員の野村竜也（龍谷大学）は、文献研究を行うと共に、唯一工学領域で本研究会に参画するメンバーとして貴重な意見交換を行うべく、年度末に報告会を企画している。

個別の研究課題を深めるということが、初年度の主な取り組みであった。その成果は今のところ、メンバー各自の報告という形で上梓されている。とりわけ大学院生、修了生たちとの討論を通して、院生や修了生が研究会報告としてまとめた小論は、玉石混交だとしてもかなりの水準に到達しているものと考えられる。今後、年度末の報告会を通じて、さらにそれらが有機的に展開し、新たな研究課題へと発展することを期待している。

なお次年度には、本年度の各自の研究関係者のどなたかにシンポジストとして参画して頂き、公開討論会を開催することも考えている。さらにそうした成果を、3年目に集約することができればと思っている。